実践研究

総合的な学習の時間を核とした カリキュラム・マネジメントの取り組み

石　垣　治　彦　　柘　植　良　雄
岐阜県羽島市立中島小学校　　岐阜聖徳学園大学教育学部

An initiative for a core curriculum and the management of comprehensive learning

Haruhiko ISHIGAKI, Yoshio TSUGE

キーワード：カリキュラム・マネジメント　総合的な学習の時間　新学習指導要領　資質・能力

Ⅰ．はじめに

１．新学習指導要領が求めているもの

新学習指導要領の移行期間に入り、いよいよ教育計画の刷新・再編成の準備に入った。学校現場では、教育課程の再編成や「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善に取り組み始めている。

中央教育審議会（平成28年12月21日）「幼稚園、小学校、中学校高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等」[1]には、「教科等を学ぶ意義の明確化と、教科等横断的な教育課程の検討・改善に向けた課題」の項目で、現行の学習指導要領が、言語活動を充実した結果、思考力等の育成に一定の成果が得られたことが示されている。また、現行の学習指導要領は「教員が何を教えるか」という観点を中心に組み立てられており、それぞれ教えるべき内容に関する記述を中心に、教科等の枠組みごとに知識や技能の内容に沿って順序立てて整理したものとなっている。そのため、一つ一つの学びが何のためか、どのような力を育むものかは明確ではない。と述べている。

さらに、このことが、‘各教科等の縦割りを超えた指導改善の工夫が妨げられているのではないか、指導の目的が「何を知っているか」にとどまりがちであり、知っていることを活用して「何ができるようになるのか」にまで発展していないのではないか（原文のまま）’と指摘されている。そして、教科等を超えた視点で教育課程を見渡し、カリキュラムの編成をする必要があり、各学校で独自の教育課程を編成することの必要性を求めている。

２．学校現場の実態と方向

さて、教科等を超えた視点で学校の教育課程の編成をしていくには、「学校の教育目標の実現」のために、教科横断的な視点に立ち、自校の子供たちの学びに合わせた教育内容の適切な配列を行う必要がある。しかしながら、学校現場では、子供の安全確保、明日の授業の準備や生徒指導、保護者対応等、多忙な毎日が続き教師が子供とじっくりと向き合う時間が制限されているのが現実である。また、新学習指導要領に対応する教育課程を各学校独自で編成するということは、現実的な問題として、学校規模による職員の人数などにより学校間で取り組みに大幅な差がつくことが考えられる。

現在、本市の多くの小学校では、現行の学習指導要領が施行された際に作成された各教科のカリキュラムは、本県のいわゆる「教育実習校[2]」等から提示された各教科の年間指導計画や教科書会社の作成した年間指導計画を中心に改良して自校のカリキュラムとした、というのが実態である。

しかし、今回の学習指導要領改訂では、いわゆる目標論・学力論といわれる部分が、「資質・能力の育成」に大きく変わり、各教科、領域の目標が全て「資質・能力の三本柱」に沿って示されているのが大きな特徴である。各担任は、学校教育目標の達成に向けて、子供の実態を見極め、既存の年間指導計画を見直し、日々の授業で「資質・能力」の育成を具現しなければならない。これはもはや、これまでの既存のカリキュラムに単なる修正を加えるだけでは、新学習指導要領の求める子供の姿には到底到達できない。教師は、これまでの実践を振り返り、教科横断的に年間の指導を見通し指導の重点化を図る

とともに、地域の教育力をも活用するなどの、いわゆる「カリキュラム・マネジメント」の発想に立った取り組みが求められている。

Ⅱ．実践研究の方法

１．研究対象学年の設定

本校では、いわゆる「カリキュラム・マネジメント」を考える際、低学年では生活科、中学年以降は総合的な学習の時間を核として実施することとした。それは、新学習指導要領が、教科等横断的に育むべき資質・能力の育成につなげるには、教科横断的な学びを行う総合的な学習の時間が最適であると判断したからである。また、低学年においては、生活科がその役割を果たすものと考えられるからである。「資質・能力」の育成には、すべての学年で、カリキュラム・マネジメントを行う必要があるのは当然であるが、研究の初年度としては、まず３学年で実践を行った。実践を３学年で行う理由は、次のようである。

・今年度の３学年主任が、本校で３年連続して同学年を担任し、年間の教科等の指導内容をよく理解している。
・そのため、これまでの総合的な時間の「成果と課題」をよく理解している。
・また、本学校区に居住しており、校区の人的資源等にも精通している。
・３、５学年の総合的な学習の時間は、活動内容が地域の文化や伝統を内容としているために、子供も活動のイメージをもちやすい。
・筆者が、３学年の教科や総合的な学習の時間の指導内容をよく理解している。

以上の条件の下で、今年度は３学年２学級（Ａ組18名・Ｂ組19名　計37名）で、担任の協力を得て、「総合的な学習の時間を核とするカリキュラム・マネジメント」を実践した。

２．研究（平成30年４月～32年３月）の進め方

(1) 研究テーマを「総合的な学習の時間を核とするカリキュラム・マネジメント」（筆者の通学する福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職大学院[3]）の研究テーマと同じ）とし、学校長や市教育委員会の了承を得る。
(2) 校内の総合的な学習の時間部会を開催し、活動の共通理解を図る。
(3) 筆者の校内分掌（教務主任）を生かし、研究成果を、逐次週報や職員会で紹介する。
(4) ３学年のカリキュラム・マネジメントの評価を、子供の姿や意見を通して行う。
(5) 実践の成果を、市の教務主任会や校長会・教頭会で発表し、各学校の新学習指導要領実施に向けた取り組みの方向性を示す。

Ⅲ．実践

上記の研究の進め方の中で、（２）～（４）に関わる内容に焦点を絞り述べる。

１．本校の実態

本校は、木曽川のほとりにある自然豊かな田園に立地する。また、児童は素直で問題となる生徒指導事例の少ない落ち着いた学校である。全国学力学習状況調査では、年度で差はあるものの成績は全国平均と同じかやや上回っている。国語では、新出漢字は確実に指導できるが、単元を通して付けたい力が不明確なまま指導したり、「教材を学習して、どんなことができるようになったのか」や「生活と関わらせて考えること」を考慮したりしないまま授業を行っていることがあった。また、算数では、単元終末のまとめの問題まで見届けられない授業も少なからず見られた。同時に、前年度の実践の成果や課題を、次年度に生かすPDCAサイクルが組織として上手く機能していないという課題があった。

こうした課題は、次のような原因によるものと考えられる。

①各学年の教科等の年間指導計画がほとんど活用されていない。
②他校との実践の交流がなく、自校の改善点を明確に示すことが困難であった。

③カリキュラム・マネジメント等、新学習指導要領の趣旨が周知されていない。
④PDCA のそれぞれが明確に意図的に実践されていない。

２．３年生の総合的な学習の時間

３年生は、探究課題として「郷土の伝統と文化」を扱い、「中島のじまん」[3] として‘中島のことを知ろう’、‘中島のじまんをさぐろう’、‘中島のじまんをつたえよう’の３単元とし、次の図１のように展開している。

４月～６月（19ｈ）
中島のことを知ろう
・校区探検
・公共施設見学計画
（中観音堂、中野の渡し、ひまわり畑、コスモス畑、加賀野井城趾等）

⇒

６月～12月（26ｈ）
中島のじまんをさぐろう
・校区の公共施設見学
・円空さんを知ろう
・中観音堂・円空資料館見学
・円空スケッチ
・円空仏づくり

⇒

12月～３月（15ｈ）
中島のじまんをつたえよう
・中島のじまん活動を振り返ろう
・円空劇を作ろう
・円空劇を保護者に披露
・２年生に円空劇を披露
・１年間の振り返り

図１　３年生の探究課題「中島のじまん」

（１）前年度までの成果（○）と課題（△）

○「中島のじまんをつたえよう」での「円空劇」は、子供が興味をもって取り組むことができる活動であり、子供も保護者も大変楽しみにしている。
○探究課題「中島のじまん」は、特に国語科、社会科、音楽科、図画工作科との関連が明確であり、子供達が教科で付けた力を発揮しやすかった。
△指導者側に、各教科と総合的な学習の時間とを関わらせて指導する意識が薄く、教科独自の学習に終始している。

（２）今年度の実践と考察

図２は、３年生総合的な学習の時間で校区にある「中野の渡し[4]」乗船後の児童の話し合いの様子である。「中野の渡し」乗船活動は、社会科の４月単元「学校のまわりの様子」で校区探検に出かけた際、Ａさんが乗船場の付近の堤防だけに階段があり（図３）、他の堤防の様子とは異なっていることを発見し、疑問をもったことから始まった。

図２ 校区探検後の発表の様子

活動後、帰宅したＡさんは、保護者に校区探検のことを話し、保護者から「中野の渡し」の存在を知ることになった。次の日、Ａさんは、「階段があった場所は、『中野の渡し』に向かうための階段であり、その階段を上がり川に向かうと『中野の渡し』が存在する。」ことを担任に伝えた。そして、「中野の渡し」は「中島のじまん」になるのではないかと考えた。

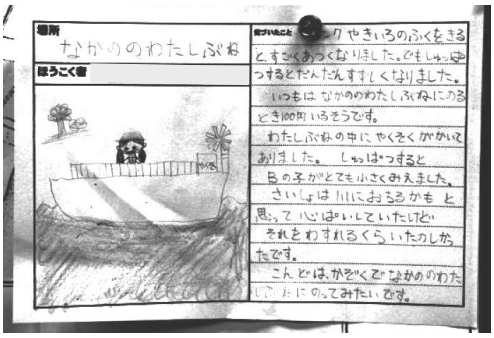
図３　Ａさんが注目した階段

担任は、子供の気付きから、総合的な学習の時間で中野の渡し舟に乗船する計画を立てた。子供達の中には、兄弟が昨年度乗船したことを知る子がおり、数人がその情報を担任に話した。校区探検後の子供の反応は、「中野の渡しは、『中島のじまん』になるかもしれない。」「渡し舟はどのようなものなんだろう。」「ぜひ舟に乗ってみたい。」という願いをもった。これはまさに、子供の主体的な活動であると同時に、課題追究における「資質・能力」に直結するものと考えられる。

子供の思いから始まり、子供が「探究したい」「解決したい」という活動を、「総合的な学習の時間」で実施することは、新学習指導要領のめざす子供の姿を具現する第一歩と考える。

今年度は、学校探検の行き帰りの道中でも、「中島のじまんになるものはないか。」「あの家は、なぜ、石垣の上に建っているのだろう。」などのつぶやきをしており、常に高い関心や意欲をもち続けて探究していたと感じた。このように、子供が主体となって生み出した活動であったため、乗船後、学年で行った交流会では、教師の問いかけに対して45分間もの間、子供の発言が次々と続いた。

図４の掲示物は、子供は、一連の探検活動の中で実際に乗船した時の感動や道中で見つけたことをありのままに伝えている。探検に行く際、「中島のことで気がついたことがあれば全部見てきてね。」という担任の声かけに対して、中野の渡し以外にも、乗船場までの道中で気付いたことなどを書いた子供もたくさんいた。そして、その記述では国語科の授業で身に付けた力（３年国語上「わかば」P 59）を発揮できたものと考えられる。図４の左は、子供が体験した順に記録を時系列で書くことができている。また、事柄ごとに段落に分けて書いている。図４右では、気付いたことを箇条書きで書くことで、読み手が読みやすいように工夫をしている。国語で学習した力を「総合的な学習の時間」の報告書づくりで生かしたといえる。



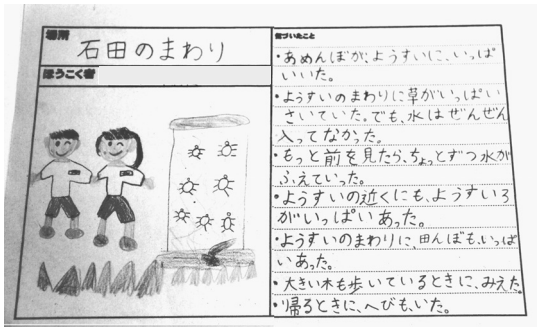


図４　国語科で身に付けた力が発揮された報告書

また、図５は、児童の発言が45分間ひっきりなしに続いた意見交流会の跡である。子供は見つけた多くの発見を、黒板いっぱいに掲示しながら次々と発言した。教師は、板書の補助など子供の思考をうまく関係づけられるように援助しただけで、まさにコーディネーターとしての役割であった。それは、担任が事前に、総合的な学習の時間における記録の仕方や発表会のあり方を考慮した上で、国語科で「報告する文書の書き方」などの指導を進めた結果であるといえる。

昨年度担任は、国語科の「よい聞き手になろう」の単元[5]が、指導計画で予定した５時間で終了しないことに困っていた。それは、「話題が見つからない」「話題が決まっても、どのように仲間に伝えたらよいのか分からない」に子供のつまずきがあり、話題作りで時間がかかりすぎてしまうことが問題であった。そのため、指導内容である「話し合う内容」「話し合いの仕方」「質問したり、感想を伝えたりすること」などの指導時間が十分に確保できなかったのである。

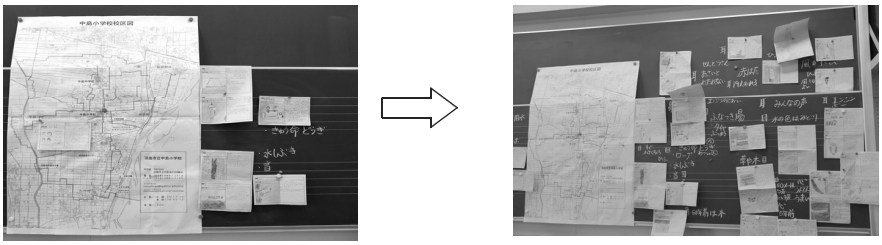


図５　板書に見る児童の活躍の跡

そこで、国語科「よい聞き手になろう」の話題を「中野の渡し乗船」の体験に決め、領域「話す・聞く」の指導を聞き方の視点を明確にして行った。総合的な学習の時間での話し合い活動が活発に進んだ

のは、このように話題が統一されていたことや、総合的な学習の時間での交流を意図して国語科の内容を指導してきたからだと考える。こうして、国語科の単元で育成する「資質・能力」を担任と共に明確にし、総合的な学習の時間での活動内容と関係づけた指導を行うことにより、教科で身に付けた力の活かし方が明確になったことが成果としてあげられる。また、教員の中にも、総合的な学習の時間が、各教科で身に付けた力を活用する集大成の時間であるという考え方が、実践を通して実感として理解できるようになってきたことも成果であろう。

一方、子供達に目を向けると、この活動を通して自分達の暮らす中島に、こうした渡し舟の文化ががあることを誇りに思う子供ができたのではないかと感じた。

この３年生の実践は、先進校で実践されているカリキュラム・マネジメントと比べると、始めの一歩を踏み出したばかりだが、このように、教科横断的視野に立ち、各教科で培う「資質・能力」を組み合わせながら、「総合的な学習の時間」を核としてカリキュラムをマネジメントすることが良いのではないかと考える。11月には全校の先生方に、これから取り組まねばならないカリキュラム・マネジメントとして、３年生の総合的な学習の時間の取組例を具体的な実践例として紹介した。

（３）総合的な学習と各教科の関連（３学年）

図６は、総合的な学習の時間が、各教科の指導計画とどのように関係づけて指導するかを一覧表にしたものである。ここでの各教科の単元配列については、あえて出版社の年間指導計画等作成ソフトを利用して作成し、市内のどの学校でも各教科間の関わりが容易に分かるという目的で活用した。

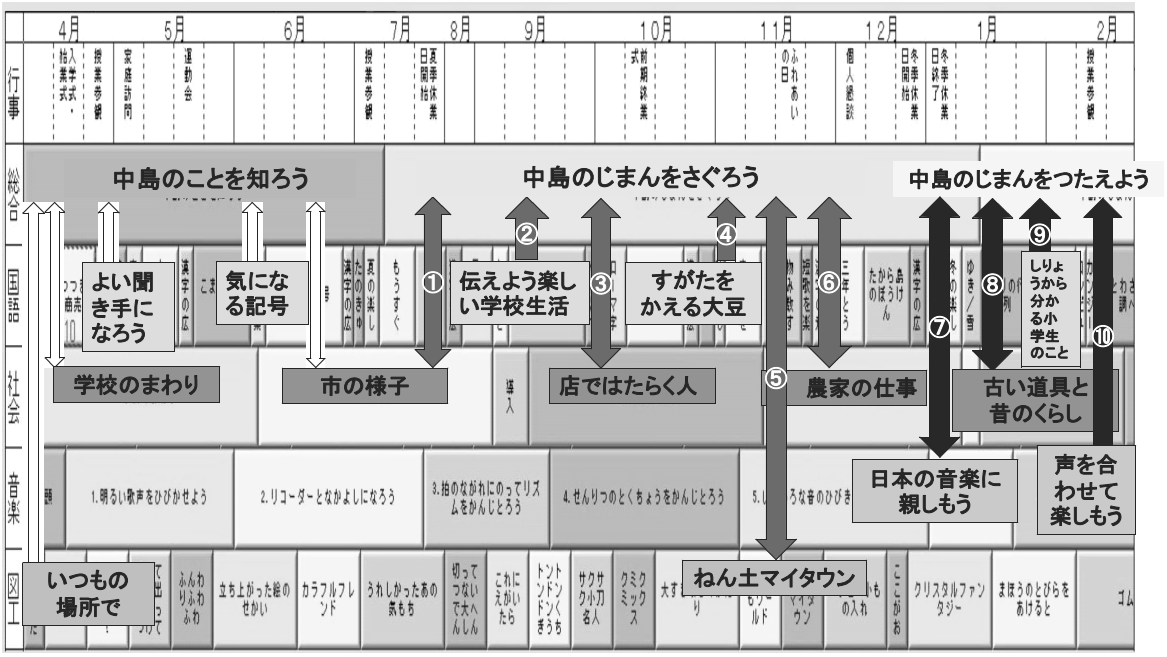


図６　総合的な学習の時間を核としたカリキュラム（３学年試案）

各教科と総合的な学習の時間との関わりは、次のように考えている。

・図６の①は、社会科「市の様子『羽島の歴史や文化にふれよう』」の学習で、「中観音堂・円空仏」「逆川しめきりの洗堰」の学習内容を、「総合的な学習の時間『中島のじまんをさぐろう』」で扱い関係付けて指導していることを示している。

・②は、国語科「伝えよう楽しい学校生活」の学習内容「学校生活の中で紹介する話題を決めて、必要な事柄を調べたりインタビューしたりすることができる」の「話題」を「総合的な学習の時間」で発見したことを２年生に伝える活動と関係付けて指導したことを示す。また同時に、社会科「市のまわり」とも関係付けて指導する。

・③は、社会科「店ではたらく人」で行う「大型ショッピングセンターを見学しよう」、「お客さんに合わせたくふうをみつけよう」で行う学習と、「総合的な学習の時間『中島のじまんをさぐろう』と関係付けて指導することを示す。そして、「大型ショッピングセンターを見学しよう」では、子供が保護者と買い物に行くショッピングセンターを取り扱い、子供の意識や実態と合わせて指導し、「お客さんに合わせたくふうをみつけよう」では、中島校区で生産された野菜を大型ショッピングセンターで販売していることと関係付けて指導する。
・④は、国語科「すがたをかえる大豆」の指導内容「内容を大きくまとめたり、必要な所は細かい点に注意したりしながら読むことができる」で、高めた力を総合的な学習の時間で発揮できるよう関係付けて指導していることを示す。今年度より、地域の方の支援で大豆を学校園に栽培して頂き、10月中旬に収穫し豆腐をつくる計画をしている。今後、学習指導計画を再編して国語科との関係を精選して位置づけていく予定である。
・⑤は、図画工作科「ねん土マイタウン」で制作する作品を、「総合的な学習の時間」の円空仏づくりの題材として指導することを示す。また、学校行事11月の「ふれあいの日」で、親子一緒に「円空仏」を粘土で作成する。そして、作成した円空仏は２月学校行事「授業参観」の「円空劇」のセットとしても使用される。
・⑥は、社会科「農家の仕事」の学習内容「羽島市の農家の農作物をまとめよう」と「総合的な学習の時間を関係付けて指導していることを示す。
・⑦は、音楽科「日本の音楽に親しもう」で「円空劇」の中の歌と関係付けて指導することを示す。
・⑧は、社会科「古い道具と昔のくらし」の学習内容「渡船がさかんだったころ」の学習を「総合的な学習の時間」で指導していることを示す。そして、前述の実践で行ったことを再度振り返るようにしている。
・⑨は、国語科「しりょうから分かる小学生のこと」の話題を「総合的な学習の時間」で学習したことを２年生に伝える学習を仕組んでいることを示す。
・⑩は、音楽科「声を合わせて楽しもう」で高めた力を「総合的な学習の時間『円空劇』」で発揮できるよう関係付けて指導している。

Ⅳ　成果と課題

○総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメントに取り組むことは、教師が、各教科で育成しなくてはならない「資質・能力」を明らかにしながら子供に指導することにつながり、従来行ってきた教科書会社の提示する指導計画等をそのまま利用して指導することが少なくなり、子供や地域の実態に合わせた計画、指導につながってきている。
○教務主任会等、他校との実践交流は未だに少ないが、各教科間と「総合的な学習の時間」の関係を見いだすと共に、自らの授業の改善点を明確に示すことができた。また、今回の実践を今後各学校に広めることで、カリキュラム・マネジメントの効果を市内の学校に示せるのではないかと考える。
○大学教員による講習会や職員の短時間の研修会、３年生の実践を週報等で紹介することにより、新学習指導要領の趣旨に目を向ける職員が増え、３年生以外の学年の担任が、年間計画や活動の見直しをしようとする意識が芽生え始めた。また、３～６学年のすべての学年で、「総合的な学習の時間」が地域と子供の実態に合わせて計画を見直すようになってきた。（６学年は年間計画の全面改良を行った。）
△カリキュラム・マネジメントは、担任する学年の教科・総合的な学習の時間の学習内容を十分に理解して行う必要があり、短期間で作成するものではなく、単元を進めながら、その都度修正を加えながら行う必要がある。

△小規模の学校において、各教科と「総合的な学習の時間」との関係性を洗い出しながら学校単独の年間計画を作成することは、一人の教師にかかる負担が大きく実現性が乏しい。中学校区や市の単位で各教科の年間計画を作成したり、「総合的な学習の時間」の内容を見直したりすることで、カリキュラム・マネジメントが実現可能となる。

Ⅴ　おわりに

羽島市では、今年度から「学校運営協議会」を活用して地域の人的・物的資源を発掘し、地域と一緒に子供を育てていくことを今まで以上に推進している。筆者は、今年度も学校運営協議会の「学びづくり」の担当として、各教科と総合的な学習の時間で必要となる地域人材等を学校運営協議会で要請した。その要請に地域の方が応えてくださり、３年生の国語科で大豆のことを勉強していることを知った方が、学校園に大豆畑をつくり児童と一緒に大豆を栽培してくださることになった。

これまでなら、各担任は、「また、大変なことになった。」、「大豆はどうやって育てるんだ？」など、困惑しながら活動を進めていたと思う。しかし、今年度は、担任の取り組み方が以前とは違ってきている。「国語科の‘すがたをかえる大豆’の学習だけではなく、理科や社会科と関係付けて指導できないか」、「頂いた大豆を栽培して豆腐を作ることで、子供は国語科の学習がよく理解できるのではないか」などの声が聞こえてくる。

３学年の総合的な学習の時間を中核にカリキュラム・マネジメントの研究を始めて半年、先生方の意識の変化は３学年だけではなく全校の先生方に広がってきている。「各教科でできるようになったことを総合的な学習の時間で発揮させよう」や「こうすると教科がつながって、子供は理解しやすいだろう」といった教科横断的な見方で授業を考えるようになってきている。

こうしたカリキュラム・マネジメントに関わる動きが広がることは、子供の分かりやすさにつながるばかりでなく、教師の教科指導力の向上や仕事の効率化・スリム化につながっていくものだと感じるようになった。福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職大学院で学んだ成果が、本校ばかりでなく市全体に広がるように働きかけて行きたいと考えている。

注・文献

1）中央教育審議会（2016）「幼稚園、小学校、中学校高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」の答申第２章及び第４章２（１）（「学びの地図」としての枠組みづくりと、各学校における創意工夫の活性化）より引用。

2）教育実習校

岐阜県岐阜市にある小学校：長良小・加納小・長良西小・長良東小・岐阜大学附属小の５校と中学校：長良中・加納中・陽南中・東長良中・青山中・岐阜大学附属中の６校を指す。岐阜大学教育学部の教育実習受け入れ校であり、３年に一度の研究発表会を実施している。研究内容は岐阜県の小中学校の先駆的な役割を担って、現在に至っている。

3）福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職大学院

平成30年度より筆者が在籍する教職大学院であり、筆者は学校改革マネジメントコースで学んでいる。福井大学、奈良女子大学、岐阜聖徳学園大学の３大学が連合して教職大学院を平成30年度より設置した。学校改革マネジメントコースの院生の研究テーマは、学校全体に関わる内容であることや２年間所属校で勤務しながら学ぶなどの特徴があり、学校拠点方式　と呼ばれる教職大学院である。

4）中野の渡し

愛知県一宮市西中野と岐阜県羽島市を結ぶ木曽川の渡し船。正式には「愛知県営西中野渡船場」

という。ウィキペディアによれば、一宮市起（おこし）地区には美濃路の宿場町起宿があったこともあり、江戸時代からいくつもの渡船場が存在し、戦後も愛知と岐阜を結ぶ交通の要として機能していた。濃尾大橋や馬飼大橋が架けられたことで事実上その役割を終えたが、その後は観光客向けに運航されている。この渡しは、岐阜県道118号と愛知県道135号の一部である。

5) 国語科：「よい聞き手になろう」

光村図書３年上「わかば」の「話す・聞く」「話の中心に気をつけて聞き、しつもんをしたり、かんそうを言ったりしよう」の単元。単元では、「よい聞き手」になるための学習を行い、「話の中心（話し手がいちばん話したいこと）に気をつけて聞く」、「自分だったらどうかと考えたり、自分の知っていることとつなげたりして聞く」、「話し手が話したいことにそったしつもんやかんそうを言う」、「ほかの人のしつもんやかんそうも、よく聞く」ことの指導を行う。